

## ■世界の子どもたちが描いた「森と草原の絵」展覧会

・国連子ども環境ポスターでカルタづくり & モンゴル遊牧民写真読み解き・

NPO 平和環境もやいネット事務局長

飯塚宜子

国連子ども環境ポスターは『国連子供環境ポスター原画コンテスト』（国連環境計画（UNEP）・地球環境平和財団（日本）・バイエル（ドイツ）・ニコソ主催）に応募された作品です。6歳から15歳までの世界中の子どもたちを対象に、毎年環境に関わるテーマを掲げて絵を募集し、優秀作は国連のカレンダーや絵ハガキ等に採用されます。総合地球環境学研究所（以下地球研）はこの事業の協力機関であり、20万点におよぶ過去20年間の全応募作品を収蔵しています。こどもたちの環境・自然に関する考え方が地域・民族ごとに反映されている、見る人を引き込む力を持つ貴重な資料です。地球研ではこれらを活用したESD（持続発展教育）の試みであるワークショップと展示を2008年から実施しており、国内外で高い評価を得ています。『森と草原の地球教室』では、森と草原のモチーフが描かれている作品100点をピックアップし、カルタづくりのワークショップと作品展示を実施しました。また特に草原の国・モンゴルをとりあげ、その生業や生活を丁寧になぞってゆく写真読み解きワークショップも実施しました。10月23日（日）には愛知県立大学学術交流センター多目的ホールにてプレワークショップを実施し展示作品をつくり、10月29日（土）・30日（日）にはモリコロパーク地球市民交流センターにてその作品展示と、多くの参加者向けの体験プログラムを実施しました。その様子を以下にご報告します。

10月23日（日）午前実施したカルタづくりプレワークショップには、名川敬子先生が主宰するアトリエ・フラワーチャイルドの生徒親子を中心にスタッフを含め32人が参加しました。参加者は100点の森と草原のポスターから、心に響く1枚を選び、絵に耳を澄ませました。鑑賞を支援する問いで構成されるワークシートに言葉を綴り、絵を描いた子どもと心の奥深くで対話します。そして親子や周りの参加者と、それぞれが選んだ絵を紹介したり読み解きを共有したりしながら、新たな気づきを得ていきます。最後に、選んだポスターをはがきサイズにした絵札と、読み解きを短い言葉で表した文字札によるあいさとおカルタをつくり、さらに絵の作者にお手紙を書きました。親子でカルタをつかった子どもたちからは「とりと動物 みんないっしょでひとつのパズル」、「ゆめを見る 植物あふれる緑の地球」「むのせかい いのちのみなもと みずひかり」などの作品が生まれました。

同日午後開催した「モンゴル遊牧民 写真読み解きワークショップ」のテーマは「大切なものってなんだろう」でした。草原で生きる自然と共生する民族—その子どもたちの価値観や今日の様子がどのよ

うなものか、日本の親子と想像の翼を広げるプログラムです。長久手の親子劇場の親子メンバーを中心にスタッフ含め31名が参加しました。遊牧民の12才の女の子・オユンティユちゃんの草原での日常生活—移動式住居、家畜の放牧、乳搾り、屠殺、家畜の糞による燃料、家族の食事、などを謎解きのように写真を通して丁寧にみていきました。遊牧民が毎日飲む塩入り乳茶「スーテーツアイ」の味見をしたり、羊の毛で糸を紡いでみたり、羊の骨のおもちゃや、伝統の楽器馬頭琴に触れてみたりもしました。そしてオユンティユちゃん自身が撮影した「大切なもの」の写真について、なぜそれが大切なのかを皆で考えました。参加者は自分自身の「大切なもの」を展示作品にまとめ、最後にオユンティユちゃんの幸福と自分の幸福が何だと思うかを言葉にしてみました。参加者からは「（遊牧民は）生きるために羊などを飼っている。羊などのからだ、全部を食べている。自給自足」（小5）、「自分は日本人で良かったと思うし、モンゴル遊牧民はモンゴル遊牧民であってよかったと思うと思う。それぞれがプラスに考え、それぞれが自分の国のいいところを大事にしていいところを探していくこと大事」（中1）、「モンゴルの遊牧民は、私たちより主体的に生きている気がした。それは、自分が食べるモノを、責任をもってつくって食べることをしていないという違いがあるのでは」（大人）などの感想などが見られました。

10月29日（土）・30日（日）、モリコロパークではそれらの作品、国連子ども環境ポスター、またアトリエ・フラワーチャイルドの生徒が描いた「大切なもの」の絵画を展示しました。愛知県立大学の学生が、多くの方へのカルタづくりのディレクションを行い、ほぼ2セットのカルタを完成させました。遊牧民の写真読み解きの参加者からは「他の動物がないとぼくたちも生きていけない」（小5）、「自分の幸せを考えたとき、意外に物質的なものは重要度が低い」（大学生）、「遊牧民と自分の幸福に共通点が見つかったことが嬉しい」（大人）などの感想がみられました。

自然の恩恵を受けて暮らす人間本来の生き方が見えにくくなっている現在、都市生活を送る日本の子どもたちにとって、森と草原に生きる人々など、自分と異なる世界に住む人々の存在、その息づきや価値観を感じ取るESDプログラムはますます重要になっています。自分が生活する枠組みを客観的にみつけなおし、自分と異なる他者への共感と想像力を広げるプログラムを『森と草原の地球教室』の中で実施でき、日本の親子が新たな価値観に触れる契機のひとつとなり得たのではと考えています。